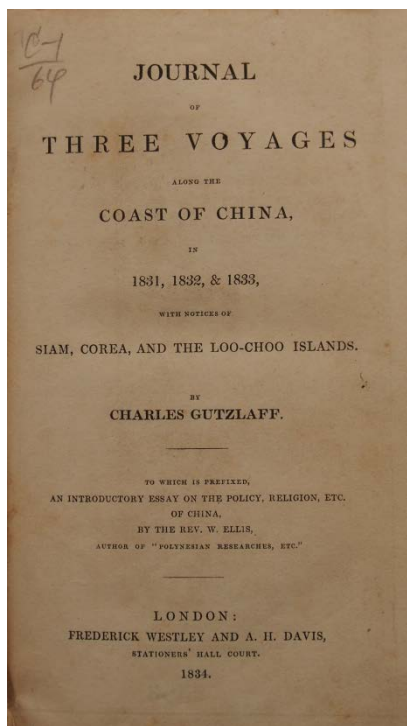




Karl Friedrich August Gutzlaff
Journal of three voyages
along the coast of China in 1831, 1832, & 1833:
with notices of Siam, Corea, and the Loo-choo islands
London, 1834

**カール・ギュツラフ『東支那海沿岸航海日誌
 (付、シャム・朝鮮・琉球記)』**

著者のカール・ギュツラフ(Karl Friedrich August Gutzlaff, 1803-1851, 英語表記Charles Gutzlaff)はドイツ人宣教師。ロンドン宣教会に所属して、タイや中国など東洋諸国で布教に従事した。本書は、彼が東シナ海沿岸の諸地域に向け3度にわたり航海した際の記録から成る。

第2の航海でマカオを出港したギュツラフ一行は、台湾、朝鮮などを経て、1832年8月、那覇港に寄港。鎖国禁教政策をとる日本の影響を受けていた琉球で、彼は琉球王への聖書献上を果たし、また、琉球の人々に接して政治、宗教、言語などの観察に努めた。

ギュツラフはのちにアメリカの商船モリソン号に通訳として乗船し、浦賀沖、鹿児島湾に来航した。幕府の異国船打払令により砲撃を受けて退去(モリソン号事件, 1837年)、日本への上陸を果たすことはできなかったが、彼がマカオで音吉などの日本人漂流民から日本語を学び訳した『約翰(ヨハネ)福音之伝』(1837年刊)は、現存最古の邦訳聖書として知られている。